ただいま子育て奮闘中
小山加代子さん（荒井）

長女（小５）、二女（小３）、三女（保育園年長）と三人娘を子育て中の小山さん。マラソンが縁で結ばれたご主人、三歳から走り始めた長女と、家族で走っているマラソン一家です。

■大変だったことは？

女の子三人なので比較的育てやすかったのですが、勝ち気な長女と活発な三女の間でおとなしい二女が小学校へ上がるころは、友達と仲良くやっていけるのかとても心配でした。一人遊びが好きでみんなのなかに解けこまないというか…。でも担任の先生に、気配りしていただいたおかげで、うまくクラスになじむことができとても感謝しています。

■ほかにこんなことが大変だったということは？

下の子が一歳の時、夫の母が亡くなったのを機に、急に看護学校へいくと夫が言いだしました。仕事をしながら４年間学校へ行く生活が続きました。夫はほとんど家に居ないことが多く、家事と子育て全般を一人で私がやり、精神的に大きな負担となりました。家族で遊びに出かけることもなかなかできず、子どもたちにも寂しい思いをさせてしまいました。そのころが一番大変でしたね。

■お子さんとの関わり方で何かありますか？

楽しく学校へ行っているので、特に心配なことはないですね。ただ、小学生になると口の利き方も生意気になり、親と対等に話すようになってきました。でもお風呂を洗ったりお手伝いもよくしてくれ、助かることも多くなりました。長女から下の子まで十年間保育園の送り迎えをしてきましたが、それももうすぐ終わると思うと寂しい気がします。

■これからの希望や夢があったら教えて下さい

今、私は自分でも走ったり、週三回は小学生にマラソンを教えています。それで、運動公園や長峰公園に外灯が多くあったら夜でも練習できるのにと思います。夫の夢は長女が中学生になったら郡市駅伝大会に矢板市の代表で親子で出場すること。私もそれを楽しみにしています。

子育て、仕事、家事、マラソン。明るいママは笑顔で話してくれました。

矢板の元気印

耳は若干遠くなってきてはいるが、記憶力は抜群。しかも、得意の盆栽は車庫の上にあり、急な階段を、すいすい上って行く姿にまず驚かされた。

村上文一さん（片岡）は、大正元年（一九一二年）生まれ、十二月が来ると九七歳になる。

村上文一さん(96)まだまだ地域で活躍
俳句名人は、盆栽の達人でもある

●元気の秘密を伺うと、まずは「好き嫌いの無い食事、適度な運動」だそうだが、質問に答えてくれる言葉の端々に、趣味に打ち込む姿勢を強く感じた。

俳句は、公務員時代の上司の影響もあって始め、昭和六〇年十二月、五味里津さん・山崎キイさんらと行動を共にし、俳句の会「竹の会」の創設にかかわったとのこと。それから現在も続いている。

代表的な入賞作品は、**「残雪は読み残したる手紙かも」**の句で、県の鬼怒誌の特選句に選ばれ、当時の有名な伏見先生（市貝）から、「雪は天から送られる手紙である」と絶賛された。

ご自分で一番良いと思われる句は？と尋ねたところ、鬼怒誌に初投句で入選し、NHKの俳句大会でも初入選した**「まぼろしの水は招くよ夏の山」**という、思い出深い句を挙げられた。

●もう一つの趣味の盆栽は、松の盆栽が百鉢以上、ほかの盆栽も数が多く、毎日手入れを欠かさない。公民館活動にも熱心で、公民館行事の際は盆栽を展示したり、野菜配りなど積極的に協力したりしたとのこと。

これまで一番楽しかったことは、空き地を毎朝五時に起きて耕し、野菜作りをしたこと。特にサツマイモを作って、保育所の子どもと収穫し、一緒に食べたこと。とても甘くおいしくできたと語ってくれた。

●友人、知人に恵まれているこの地域が大好き。しかし、もっとあいさつの大切さを知り、明るい元気な町になってほしいと、少々厳しい注文も忘れなかった。

はじめまして！

着任早々「矢板支局を高原支局という名にしては？」とコラムに書いて、多くの人の共感を得たのが、新しい下野新聞矢板支局長の河上晴一さん(58)。ぜひお話を伺いたいと、かわら版の編集会議に来ていただきました。

◆定年間際の最後のフィールドは自分の好きなことをやりたいと本社整理部からの異動。登山が好きでいろいろな山に登っている河上さん、「高原山をなめてかかっていたんですね、三度目の正直でやっと登ることができました。矢板は自然豊かで落ち着いた良いまちですね」とのこと。

◆質問に丁寧に答えてくださるその声にとても艶があり、よく通ります。

それもそのはず、高校時代から合唱部でバスパートを担当。いまでも男声四部合唱のメンバーで、二カ月に一度は東京で合同練習をしているといいます。

鹿沼支局時代に市制50周年記念イベントで第九の合唱をやった時も交ぜてもらったのですが、本番の時には最前列のソリストのすぐ後ろで歌う羽目に。筋金入りの声なのです。

◆「へそ曲がりなんですね、羽振りの良い人は取り上げたくない。昔からの技術を大事に保存している人たちを取り上げ、地域に根ざした技術を発掘してみたいですね」。

鹿沼から異動する時、当時の西方町の教育長から「あなたは、地域の隅っこで生きている人をよく見ていましたよね」というはがきをもらったことがいまだに忘れられないと言います。

「そこに住んでいる住民が記事を通して共感できる、輪が広がってくる、そんな橋渡しができれば…」と語る柔和な笑顔の中に、時折強い正義感を感じました。

編集後記

新イメージ版はっぱ今号からはニュースレター後記者にバトンタッチ。今号で聞き手を担当した。聞き手ものしかくて汗ばみました。感想やアドバイスをいただき編集委員のみなさまとりあえず名ほしいな……。